

## 第9群 生理解剖に関する問題 I (一般)

## 52. 腔内容の螢光顕微鏡学的研究

(順天堂大) 水野重光, 長峰敏治  
田口正夫, 板谷忠重, 竹内久弥

すでに第12回総会において水野は真菌症に関する宿題報告の中で, 腔粘膜上皮および腔内容塗抹標本から Acridine系螢光色素を用いて, カンジダ症を診断することができることを発表した, 今回さらに腔内容全般にわたり, 他の染色法と比較しつつ螢光顕微鏡学的に検索したので, その概要を報告する。

一般に二次螢光像は, その染色条件によつて, かなりの変動を示し, また被検物の相違によつても螢光は異なるので, 腔内容全般に最も良好であつた条件で二次螢光を発せしめ検索した。

それによつて腔内容中に存在する腔上皮細胞, 子宮頸管細胞, 異形細胞, 子宮頸管粘液, トリコモナス, カンジダ, Döderlein 腔桿菌, 大腸菌, その他の細菌, 白血球, 赤血球, 精子等はそれぞれ特有の形態, および微細構造の螢光像の差異で, かなり明瞭に検索し得た。

尚, その簡便な検査手技と合まつて, 今後の研究如何と装置の発達で, 螢光法の診断学的価値は倍加されよう。

## 53. 家兎子宮頸管粘液の実験的研究 第2報 Na, K. について

(東女医大) 井口登美子, 相羽早百合

人子宮頸管粘液中の化学成分については, 有機, 無機の諸物質の存在が次第に明らかにされ, かつこれらの成分が性ホルモンの支配下に変動する様子も解明されつつある。正常な月経周期を有する成熟婦人においては, 頸管粘液中化学成分の濃度は排卵期に最も薄くなる様な周期的変動を示すものが多く, 現在迄にはナトリウム及びクロールのみが逆に排卵期に最も濃度の高くなる事が知られている。家兎を用いて分析した結果では, 頸管粘液中のナトリウムは平均  $126\mu\text{Eq/g}$  であり, 血漿中濃度と殆んど等しい事が示された。これに対しカリウム濃度は平均  $15\mu\text{Eq/g}$  でナトリウムに比較すれば約  $\frac{1}{8}$  の低値であるが, しかし血漿中濃度に比べればかなりの高値が得られた。胎盤製剤(シナホリン)投与によつて排卵を誘発せしめるとナトリウムのカリウムに対する比が増大する傾向がうかがわれる。又頸管粘液のシダ葉状結晶の本態については食塩が蛋白及びムチンと適当な存在比

に存在する為に呈する結晶であるとされている。頸管粘液或いは蛋白質, ムチンと食塩を混合した溶液を用い, 人工的に種々の条件を構成し, 得られる乾燥標本の像につき, 結晶生成の条件を考察した。

## 54. 子宮頸管の性状に関する研究(第2報) 試作子宮頸管緊張度計による子宮頸管の緊張度に就いて

(名市大) 渡辺金三郎, 馬場太郎, 米光 洋  
森田 潤, 田村通和

頸管無力拡大症の本態を究明する一方法として, 我々は先に「パロン」法を応用した子宮頸管緊張度計を考案試作すると共に, 本装置に関する基礎的実験成績について発表した。

尚本装置の主検知部は頸部狭部の内径の大小及び収縮性変化を「ガス」圧の変化として描記出来るパロン(A)と, 頸管に一定圧を加え得るパロン(B)を並行に組合せた特殊「カニユーレ」であり, 非妊子宮の頸管に挿入し得る程度の狭少なものである。

今回は本試作子宮頸管緊張度計を用い, 習慣性流早産を始め各種疾患の患者に臨床応用し興味ある知見を得たので報告する。

(1) 頸管の緊張度は月経周期に伴い変動し, 黄体期に最強となる。

(2) 頸管の緊張度は麻酔剤の種類により相違を示す。

(3) 妊娠中期以後の習流で頸管拡大症を有する者の頸管緊張度は特有である。

尚, 之等所見と, 子宮卵管造影, ヘガール頸管拡張器による抵抗, 我々の試作したピンセットの弾性応用頸管内径測定, B.B.T. 曲線並びに手術所見との間には一定の関連性が認められた。

## 55. 産婦人科領域に於ける筋収縮性蛋白 (Actomyosin) に関する研究 (第1報) 子宮頸部筋 Actomyosin 溶液の粘度に就いて

(名市大) 渡辺金三郎, 馬場太郎, 大野義彦  
伊藤裕正, 鈴置洋三, 平竹章二  
鳥居萬年

頸管無力拡大症が習慣性流早産の原因の一つとして取りあげられた現今に於て子宮頸部筋の Actomyosin (A